



TITLE:

金末の士風と元曲

AUTHOR(S):

高橋, 文治

CITATION:

高橋, 文治. 金末の士風と元曲. 中國文學報 1982, 34: 1-35

ISSUE DATE:

1982-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177394>

RIGHT:

金末の士風と元曲

高 橋 文 治

追手門學院大學

一 『薦福碑』について

元曲に『薦福碑』という芝居がある。作者は馬致遠、彼の號は東籬、十三世紀大都（ペキン）の人といわれる。彼は典雅な文辭を誇り、元曲四大家の一人とされるが、この『薦福碑』という雜劇も、彼のそうした名聲を裏切らぬ第一級の作品とすることが可能だろう。

この芝居は、『冷齋夜話』に記述する次の話に取材するといわれる。

北宋の名臣范仲淹が鄱陽の知事であった頃、ある書生の獻じた詩が非常に優れていた。その書生は、天下に自分ほど貧乏に苦しむ書生はない、という。そこで范仲淹は、その頃もてはやされていた歐陽詢の拓本を賣って彼に一

金末の士風と元曲（高橋）

もうけさせるべく、紙と墨とを用意するのであったが、いざ、その書生が拓本をとる段になると、薦福寺という寺にあった歐陽詢の石碑に雷が落ち、石碑は粉みじんになったという。

元曲『薦福碑』は、劇全體の主題といった點からすれば、この『冷齋夜話』の話にある意味で忠實に受け嗣いだものかもしれない。というのも、元曲『薦福碑』の主題は、プロットが様々な紆餘曲折を見せながら展開されるにもかかわらず、常に八書生の不遇という一點にしばられているからである。第一折から團圓に到るまで、主人公の、たとえば次のような嘆きの歌が繰り返されるのである。

〔仙呂點絳脣〕我本是那一介寒儒 半生埋沒 紅塵路
則我這七尺身軀 可怎生無一個安身處

わたくしは一介の寒儒、半生を俗塵の中にうもれさせてまいりました。わが七尺のこの身軀からだ、どうして一所として安身の地がないのでしょうか。

これは、第一折で主人公が登場すると同時に歌われるものであるが、『薦福碑』という雜劇のおよそどこでも、こ

れと似た口吻で書生の嘆きや怒りがぶちまけられているのである。

が一方、プロットそれ自體を見る時、この芝居は、『冷齋夜話』を忠實になぞるものとは必ずしも言えないかもしれない。元曲『薦福碑』は、かなり通俗的で大膽な潤色が施されているといつてよいのである。中でも、物語の展開上最も重要な潤色は、范仲淹がその書生に三通の紹介狀を與えたことであろう。一通目が洛陽の黃長者宛、二通目が黃州團練使劉仕林宛、第三通目が揚州太守宋公序宛である。そして元曲では、主人公の書生がこの三通の手紙を手に苦難の旅を續ける途上、たまたま身を寄せた薦福寺の和尚が彼に同情して、歐陽詢の石碑の拓本をとることを勧めてくれるのである。つまり、『冷齋夜話』の簡單な記述は、元曲では一つのエピソードに過ぎぬ形に改められているのであり、しかも、そのエピソードも、范仲淹とは切りはなされて、和尚と書生をめぐる挿話となっているのである。

さて、この芝居に見られる潤色や改定が、作者馬致遠の創意から出たものかと言えば、無論そうではなかった。元

雜劇の多くがそうであつたように、前代の諸宮調や話本の段階で、已におよその潤色と改定は完了していたと思われる。『薦福碑』に關して言えば、そのことは『歸潛志』卷九によつてある程度確認し得るだろう。

中朝人物翰林才 中朝の人物 翰林の才

金節煌煌使夏臺 金節煌々として夏臺に使いす

馬上逢人唾珠玉 馬上人に逢えば 珠玉を唾き

筆頭到處灑瓊瑰 筆頭もて到る處瓊瑰を灑らさん

三封書貸揚州命 三封の書もて揚州の命を貸るも

半夜碑轟薦福雷 半夜にして碑は薦福の雷を轟かす

自古書生多薄命 古より書生は多く薄命

滿頭風雪卻廻來 頭に風雪を滿たして 卻廻り來るの

み

(3) この詩は、楊雲翼(字は之美)が趙秉文(字は周臣)に贈つたものだといふ。趙秉文とは、言う迄もなく金朝隨一の巨公であるが、彼はもと清貧に甘んじた人でもあつた。正大(一二二四―一二三二)の初、西夏の滅亡にともなつて新主を立てるために、彼は西夏に使用することとなつたが、人々は

恩賞が多く與えられるであろうことを噂しあった。しかるに、趙秉文が出發した後、事は沙汰止みとなり、彼は急遽呼び返されることになる。その時楊雲翼が驛卒に託し趙に贈ったのが、この詩だったのである。詩中にいう、「三封の書もて揚州の命を貸るも、夜半にして碑は薦福の雷を轟かす」とは、富貴の身となることを期待したかもしれないが、書生は所詮貧乏なもの、折角の機會ではあったが結局恩賞はもらえないのだ、ということを通俗的故事・乃至成語を使つて説いたものであろう。また、無論のことではあるが、この詩は嘲諷詩なのであつて、これを贈られた趙秉文も覺えず大笑したと同じく『歸潛志』は記述している。

それはともかく、當時喧傳されたというこの詩によつて、我々は、『冷齋夜話』の簡単な逸話が、已に金末には三通の紹介状のエピソードを伴つた物語に發展していたことを知り得るのである。しかも、馬致遠の雜劇『薦福碑』の正目は、天一閣本『錄鬼簿』によれば、「三封書謁揚州牧半夜雷轟薦福碑」であつて、この楊雲翼の詩の第五句・第六句と非常によく似ているといつてよい。『薦福碑』とい

金末の士風と元曲（高橋）

う芝居は、物語の起源そのものは北宋に端を發していたとしても、實際のモデル、乃至たね本は、恐らく金朝から受け嗣いだこうした詩や、その底邊を成す講談の類にあつた。更に謂えば、單にプロットのみではなく、或いは劇全體のムードまでも、この芝居は金朝から受け嗣いでいたのかもしれない。

『薦福碑』というこの芝居に於いて、金朝の遺風が端的に示されているのは、先ず何より第一折「醉扶歸」という次の曲であらう。

這厮蠢則蠢家豪富 富則富腹中虛 便道東道和門館德不孤 他純經義不詞賦 他識字呵不抵死十分看書 他則是箇中選的鋤田戶。

こやつめ、バカはバカだが家は金持、金はあるにはあるが腹の中はカラッポで文章などつまつておらぬ。パトロと書生と、『徳は孤ならず』と言つたつて、やつはもっぱら經義で詞賦でない。字は識つていとはいえ、あくまで讀める程度。たかだか、田作りで合格するに過ぎない田舎者。

これは、パトロンである富農を主人公の書生が皮肉った歌であるが、ここに歌われる「他は純ら經義で詞賦でない」とは、明らかに金朝の詞賦科尊重を背景としてもつものであろう。金朝は、科舉をもつて滅んだと一般に言われる程に詞賦の學が重んぜられた時代であった。事は『歸潛志』などにも詳しいが、殊に貞祐の南遷後、士人は國家の危急もよそに、もっぱら詞賦の學に勵んだと、ある人は苦々しく記述しているのである。この曲に於いても、パトロンの富農を皮肉るのに他ならぬ「もっぱら經義科だ」という言い方が使われているのであって、金朝の詞賦學尊重の遺風が、はからずも顔をだした形になっているのである。

そして、この芝居の主題へ書生の不遇Vにしても、作者馬致遠の人生の反映では無論なく、また、單に『冷齋夜話』を受け嗣ぐだけのものでもなかったろう。自身をも含め士人層全體を不遇と觀ずる氣風は、前掲の楊雲翼の詩からも多少推測される如く、實は金末の士人層に廣範に培われた時代精神だったのであって、むしろそうした氣風の延長線上にこの『薦福碑』という作品を位置付けることも決して

不可能ではない。また、この場合、楊雲翼の詩が實際には嘲諷詩として機能していたことにも、我々は注目しておいてよいだろう。というのも、彼の詩が嘲諷詩たり得ているのは、へ書生の不遇Vを嘆きながらも、一方では、自身を不遇にする世俗そのものを笑いとばそうとする氣風があったからに他ならないからである。これは恐らく、馬致遠をはじめとする多くの元曲作家が模倣した精神でもあったと思われる。

そもそも、華北十三世紀に於ける元曲の勃興は、當時の士人の深く關與するものであった。そのことは、先賢の優れた研究で已に明らかにされている所である。むしろ、それら士人の關與があつたからこそ、元曲があれ程の質の高さを誇るようになったと見るのが、文學史家の定説なのかもしれないが、馬致遠という作者も、その作風から見て、それら士人作家の一人であつたことは明らかであろう。そして、元曲初期の作者に關する限り、それら士人作家のすべてが、大なり小なり金朝の遺風を受け嗣いでいたことは、

ごく當然のことでもある。關漢卿や白仁甫を、新體制に参畫することを屑しとしなかった金の遺民達であったとする『青樓集』⁽⁴⁾の言を鵜のみにせずとも、元初という時代が金朝の人民と版圖をおそって成立していた以上、その時代に生きた人々が金朝の遺風の影響下にあったことは明らかである。

しかしながら、當時の多くの士人達をして元曲にむかわしめたものは、科擧の廢止をはじめとする新體制の體質が彼等を不遇にしたからではなかったと思われる。また、王朝交替の悲劇が彼等に生活意識の改革をせまったからでもなかったであろう。むしろ彼等は、金朝（特に貞祐の南遷後のそれ）の遺風を忠實になぞり、受け嗣いだのであって、その結果生まれたのが、多くの散曲や雜劇だったのではあるまいか。

たとえば吉川幸次郎博士は、名著『元雜劇研究』の中で士人作家に言及し、不遇による自嘲の意識が彼等をして元曲にむかわしめたのではないか、といった議論を展開されておられる（全集十四卷（二九）一四四頁）。博士の議論は甚だ妥當なもの

金末の士風と元曲（高橋）

であり、大きな修正を必要とするものではないが、ただ、氏の論述される自嘲の意識なるものは、ある意味で當時の華北全土をおおったものであり、しかもそうした意識自體、金朝時代からもち越されたものだったと考えられる。金の士人達は、金朝滅亡を経験せずとも、已に十分自嘲的な意識を有していたのである。更にまた、そうした金朝の氣風は、士人層全體に單に屈折した心理傾向を植えつけたのみならず、一方では、その屈折をも笑いとばす「玩世」的な華やかな生活態度をも育んでいたと思われる。そして元曲にとっては、この華やかな局面の方が、實はより大きな意味をもつと考えられる。というのも、もしそうした一面の華やかさがなかったならば、孫楷第氏の『元曲家考略』に展開されたような數多くの士人達が元曲に手を染める筈もなかったからである。元曲の如き豊かな文化が、自嘲にのみ傾いた一部のパッシングな人種によって生みだされたと考えられる筈はあるまい。つまり、元初の士人層と元曲を結び付けたのは、士人層の屈折そのものもさることながら、同時に、屈折の反動として金朝時代に醸成されていた、華

やかで「玩世」的な氣風でもあったと考えられるのである。金朝治下の士人達が培ったそうした氣風の中にこそ、或いは、士人層をして元曲に關與させた一つの大きな要因があったかもしれないのである。

二 東平の士風と元曲

元曲と金朝の遺風の關係を考える上で重要な示唆を與える作家に、水滸劇で有名な高文秀という人がいる。彼は、天一閣本『錄鬼簿』によれば、東平の人であり、東平府學生員であつたという。彼も恐らく、儒學の教養を積んだ士人作家の一人であつたのだ。そして、彼が水滸劇を多くもつたのは、恐らくその出身地に深く關つていたのであろう。というのも、梁山泊は東平の南隣りに位置する濮原地帯の名に他ならなかつたからである。

この東平は、恐らく元曲の一大中心地でもあつた。高文秀をはじめとして、東平に關わりをもつ元曲作家に、杜仁傑・商挺・王修甫・張孔孫・徐琰・李好古（一説に西平の人ともいふ）などがあるからだけでなく、この地が、金末元初

に大きな勢力を有した漢人世侯嚴實・嚴忠濟父子の據點でもあつて、その嚴忠濟が散曲の作者でもあつたからである。無論、忠濟にとって散曲は單なる餘技に過ぎなかつたであろうし、また、現存する彼の散曲も武人の餘技たる出来ばえしか示していないが、それにしても、彼のような人物が散曲を書くに到るには、それなりの環境が必要だったのである。また、彼は歌妓のパトロンでもあつた。東平が元曲の一大中心地であつたことは、容易に推測し得る所なのである。

そしてこの場合重要なのは、この東平が元曲の一大中心地であつたことと同時に、金朝の遺風を最もよく傳えた地であつた點である。

周知の如く、元初に於ける東平府の顯著な特徴は、先ず何より科舉推進派の砦であつた所に認められる。科舉の學は、この時代に限つて言えば、主に詞賦の學であつた。つまりそれは金朝の遺風である。東平がこうした詞賦學の據點となつた事情には、地理的條件や、當時の政治的狀況など、複雑な事情がからむので、ここでの詳述は避けるが、

ただ、東平府學の詞賦學を育てあげたのは、元好問などをはじめとする、やはり金の遺民達だった。東平嚴氏のもとには、非常に多くの遺民があつまつた。たとえば、元好問が一二三二年に耶律楚材に宛てた有名な嘆願書があるが、そこに記載する五十四名の遺民のうち、十六名もの人々が何らかの形で東平嚴氏と關係をもつたことを、今日色々な資料から確認し得る。この數字は、單に元好問の手紙の中だけのものなのであつて、手紙に名を含まない人々（たとえば宋子貞・李昶・劉肅・王磐・張特立などの名士や、その他無名の士人）を考えれば、『元名臣事略』に已に言う如く、實際に他の世候に比して群を抜く數となるのである。そして、こうした遺民達の作りあげる雰囲気の中に元曲の士人作家達も身を置いていたのであり、東平こそは、元曲の作家を考える上で非常に多くの示唆を與える土地だと言うことが可能だろう。つまり、元初の東平に見られる士風は、この場合、少なくとも金朝と元曲の接點を示す、重要な意義をもち得るのである。

この東平と元曲の關係については、安部健夫氏が『元代

金末の士風と元曲（高橋）

知識人と科擧』というすぐれた論考の中で、已に次のように言及されておられる。

文章派の人（東平や眞定などの地で、金朝の學風を傳えた人々を安部氏は便宜的に「文章派」と規定した）に通じて見られる特徴は、例えば商挺について「東平に歸り、日に魯の諸賢と琴詠會をなせり」といわれているように、友人たちが互いに詩賦を應酬しあつて樂しむといった風雅の尊重であつた。風雅や音樂は度が過ぎると奢侈になる。嚴實の子忠濟については、一面善政を傳えられながら、反面、「飲宴して度なく、庫藏は空虚なり、百姓匱乏せり……浮華を去り、宴遊を省くにあらずれば、災至らん」と或る人が言つたことも傳えられているのである。浮華を重んじ宴遊を事としていたことも充分ありうることであつて、いわゆる文章派的な雰囲気や極端に推し進めたものといえる。文章派をとりかこむ雰囲気やより象徴的に言うことが許されるならば、あの華やかな雜劇の氣分を愛好し、俳優歌妓のパトロンとなり、まかりまちがえば自ら筆を執つて雜劇の一折でも物しかなないといった

。。。それであつた。

これは無論、東平嚴氏をめぐる士風の一面に過ぎなかつたが、また、元曲にとつては非常に重要な一面でもあつた。商挺⁽⁸⁾(字は孟卿、號は左山、亡國前後の數年を元好問や楊奐とともに過し、後に東平府の幕官となつた。元初の名臣)や忠濟は、雜劇は書かなかつたにしろ、現實に散曲の作者であつたし、歌妓のパトロンでもあつたのである。たとえば商挺について言えば、現存する彼の散曲のほとんどすべては所謂側豔詩⁽⁹⁾(戀愛詩)であつた。

〔雙調潘妃曲〕小小鞋兒白脚帶 纏得堪人愛 疾快來
瞞着爹娘做些兒怪 你罵喫敲才 百忙里解花裙兒帶
小さな鞋に白い脚帶、まことに可愛くまけている。その脚で、いそいでここまでやってきたのは、父様母様だまして怪しからぬことをしでかすためだ。お前は私をやくない者と罵るが、そのくせ、そそくさ花なす帶を解きはじめる。

戀愛劇の一コマを歌うが如きこの散曲の背景には、安部氏の述べられるような華やかな宴遊と歌妓に親しむ氣風とが

あつたと思われるし、また、通俗性により傾いた散曲の例としては、徐琰(字は子方、東平府學の出身で、元好問の直接の薰陶を受けたという)の「青樓十詠」などもあげ得るだろう。この散曲は、△初見△から△敍別△に到るまでの青樓でのたわむれを連作にしたもので、元初の士風をよく物語るものといつてよい。ここでは「間阻」と題される「青樓十詠」とは別の散曲を一部引用しておくが、これも、襯字と俗語を多用する、元曲ならではの通俗性と饒舌性を有するものである。

〔尾聲〕再幾時能够那柔條兒再接上連枝樹 再幾時能够
那暖水兒重溫活比目魚 那的是着人斷腸處 窗兒外夜雨
枕邊廂泪珠 和我這一點芳心做不的主

いつになつたら、あの柔らかな枝が連理の樂しみをとりもどすことができるのか。一體いつになつたら、あの暖かな水が比目の魚を生きかえらせるのか。お前とて、たまらぬ思いに違いない、窓の外の夜の雨、枕邊の涙の珠は。このオレ様までが、胸の思いをどうあつかうこともできずにいるのだから。

言う迄もないが、これら商挺や徐琰の散曲が、東平という地域の特異性を物語っているのではない。戀愛をテーマとすることは、むしろ△詞曲▽の常套なのであって、その意味では類型的でこそあれ、これらの作品を東平という地域に結び付けて考えたり、或いは特に高く評價することは不可能なのである。また、元初の士人が多く妓女に親しんだという問題についても、今更私が述べるまでもなく、已に吉川幸次郎博士が『元雜劇研究』の中で詳述しておられる所であった。ただ、ここで私が注目したいのは、金朝の士風を最もよく傳えた東平の士人達が、實は典型的な散曲作家であった點である。しかも商挺などは、元好問が耶律楚材に與えた手紙にその名を記された、金の遺民の第一世代でもあったのだ。

元好問の手紙に名を記された遺民の第一世代の中で散曲作家となった人物には、他に杜仁傑があげられる。杜仁傑、一名善甫(夫とも書く)、字は仲梁、號は止軒。當時最も名を知られた名士の一人で、散曲の傑作「莊家不識枸欄」の作者として有名なこの人物も、實は東平と深い関わりを

もっていた。それは、彼の故郷が濟南だったからでもある。

杜善甫⁴⁰は仕進を屑とせず、嚴氏の下に身をよせた。嚴氏とは濟南(濟南とは、記述者の誤りであろう)の望族である。善甫はそこで禮遇されたが、ある日中傷をうけて嚴氏との間に溝ができてしまった。善甫が詩を書いて詫言を入れた所、嚴氏も事情を悟り、兩者の關係ももともにとったという。また、嚴氏は時に外征に赴くことがあった。その間、嚴氏の妻は終夕宴會にふけるので、善甫は詩を書いてそのことを皮肉った。客の中にはそれを愉快に思うものもいた。ある人が彼を朝廷(蒙古)に推薦したので召喚を受けたが、彼はそれをことわり、赴かなかったという。(『山房隨筆』)

この杜仁傑がやはり歌妓に親しんだのは無論のことであった。そのことは、元好問の七律「送杜子(杜仁傑のこと)」にいう、「東原(東平の古名)の春は好しくして妓は圍を成す」を必ずしも根據にせずとも、彼の散曲「喻情」を見れば容易に推測し得る所である。また、仕進を屑と

せず、「滑稽」や毒舌を旨としたこの人物は、後の元曲作家が多く模範とした代表的散曲作家であったが、ただ、彼をして通俗的散曲にむかわしめたものを、彼の個人的な自嘲の意識に歸着させることには、容易に承服しかねるものがある。杜仁傑をして散曲にむかわしめた原因としては、東平などのかす華やかな雰囲気や、遺民達の共有していた當時の氣風を、まずあげなければならないだろう。というのも、東平の状況を見る限り、彼をはじめとする多くの遺民が散曲作者となっているのであり、しかも、杜仁傑のもつ「滑稽」や「仕進を屑しとせず」、或いは歌妓に親しむといった氣風は彼獨自のものでは決してなかったからである。

たとえば、様々な點で東平の氣風を典型的に示すと思われる嗣侯嚴忠濟の生活態度の中に、「滑稽玩世」的な處世の反映が濃厚に感じられるのは、この場合、杜仁傑の人生が決して例外ではなかったことの一つの證しとすることが可能だろう。

周知の如く、嚴氏一門は中統二年（一二六一年）に忠濟が萬戸の職を解かれて以來、フビライの漢地政策の變更もあって、一方的に凋落してゆくのだが、『元史』は、忠濟の改易後の生活を次のように傳えている。

大權を謝去する及び、貴にして貧を能くし、義命に安んず。世は是れを以て之を多とす。

こうした忠濟の晩年は、彼が金の遺民達の生活態度を模倣して、世俗を超越し世を玩ぼうとしたことの一つの表れであり、宴遊を事とし歌妓のパトロンとなったことと揆を一にすることと思われる。宴遊に耽ることは、刹那的に生を貪ることであって、中國が『古詩十九首』以來一貫して持ち續けてきた思想傾向であったが、こうした刹那思想は、世の悲哀から解放されようとする感情が背景にあるのは無論のことと、その意味では明らかに一種の超越思想であった。そして、忠濟がその晩年義命に安んじようとしたのも、まさにこの超越思想の一つの反映だったのであるまいか。

胡祇遹（字は紹開、號は紫山）は、嚴氏一門の不遇を次のよ

うに語る。

題嚴東平忠止亭十一絶(第十一首)

作詩題榜匪要名

詩を作りて榜に題するは名を要むるにあらず

心靜身閑意自誠

心靜かにして身閑なれば意自ら誠なり

只作故侯終老去

只だ故侯の終老し去ると作して

也知原不累高情

也た原も高情を累わづらわされざるを知るのみ
『紫山大全集』卷七)

改易後の忠濟の感情が實際にはどのようなものであったかは別問題にしても、この詩の内容が「高情を累わづらわされず」という點だったことは、やはり注目してよいだろう。なぜなら、超越的「高情」を價値の中心に据え、虛名から解放されてあらうとするこの感情は、「滑稽玩世」的處世に通じる他ならぬ金の遺風であり、しかも、元曲の作者達が廣範に模倣した感情でもあったからである。この場合、詩にこめられた感情自體は、無論作者胡祇遹のそれであつたろうが、こうした超越的感情が詩にされるに至つたのは、嚴

金末の士風と元曲(高橋)

氏の處世のあり方に觸發されてのことだつたらう。『元史』に記述する、義命に安んじた忠濟の處世は、少なくとも表面的にはこの「高情」に由來するものといつてよいと思われる。

というのも、嚴忠濟自身は、彼の散曲の中で次のように歌っているからである。

「越調天淨沙」寧可少活十年 休得一日無權 大丈夫時乖命蹇 有朝一日天隨人願 賽田文養客三千

むしろ十年命が縮もうとも、一日たりとも權力なしでいられるものか。大丈夫というものの、生涯運拙うなづくとも、ある日思いどおり運がむいたら、孟嘗君さながら三千の食客を養うのだ。

また、

「雙調壽陽曲」三閭些 伍子歌 利名場幾人參破 算來都不如藍采和 被這幾文錢把這小兒瞞過

三閭大夫屈原殿よ、伍子胥も歌え。名利の道に一體どれ程の人が首をつつこんだことか。思うに、この世は藍采和の如き仙人の道には所詮及ぶ筈もない。この少しばかり

りのゼニのために、オレも随分はぐらかされたものだ。

こうした忠濟の散曲が座興の作であつたことは言う迄もない。彼の散曲は、この二曲しか現存しておらず、また出来ばえから言つても、彼が散曲の名手でなかつたことは明らかなのだが、そのことがかえつて、この散曲を嚴氏をめぐるサロンの氣分を的確に傳えてくれるものにもしているのである。この二曲は、或いは忠濟が萬戸を解任されてからの作かもしれない。曲の内容はそのことを明瞭に感じさせはする。が、それがいつ作られたにせよ、曲が身の不運を笑いとばそうとする「玩世」的態度に由來するものであることは、更めて述べるまでもあるまい。我々は、こうしたいかにも類型的散曲の中に、元初の東平をとりまく氣風を端的に感得することが可能なのである。そして、東平と言わずとも、元初の華北には「この世は所詮藍采和の如き人生に及ばない」といった超越思想が蔓延していたのであつて、忠濟はそうした氣風をただ單に模倣したに過ぎなかつたのである。世俗を笑いとばそうとするこの態度の中にこそ、忠濟の晩年をして義命に安んぜしめた重要な要素があ

つたといつて、恐らく過言ではないだろう。

こうした忠濟は、また一面、「忠義」の人であつたかもしれない。それはちょうど、東平が詞賦學の砦としての局面をもつていたことに相通じる。詞賦學とは科擧の學であり、科擧が朝廷に於ける君臣關係（つまり「忠」）を前提としているのは言う迄もなかつた。そして東平に於いては、「滑稽玩世」的處世態度が、君に「忠」たろうとすることの妨げに決してならない、獨特の氣風があつたと思われる。

胡祇通は、前掲の連作の中（第七首）で次のようにも述べる。

大臣報國無多巧

大臣の國に報ずるは多巧無し

進退升沉有一忠

進退升沉に一忠有るのみ

疑怪茅亭多種竹

疑怪^{うたが}うらくは、茅亭多く竹を種^ううる

ことを

要看直節貫霜風

直節の霜風を貫^みくを看るを要するな

り

私自身は、忠濟という人物を忠義の人とは必ずしも考え

ない。彼には恐らく大きな野心があった。宴遊を事としたというのも、或いは、華北の士人を傘下に収めるための方便だったかもしれないのだが、いずれにせよ、世に出て君に忠たろうとする人物が、一方では歌妓とたわむれ、「滑稽玩世」といった生活態度を是認するのも、東平の士風であつたのだ。

嚴忠濟に見られるこうした二つの局面は、東平に集まつた遺民達の處世や性格からも無論確認することが可能である。

辛丑⁴³（一二四一年）の元日、私が東平に旅していた折、閻載之が様々に宴の準備をし、私をはじめとし大興の張聖予（俞とも書く）、祁の宋文卿、東光の句龍英孺、鎮の劉子新、太原の崔君卿、渾源の劉文季、壽春の田仲德等を招いてくれた。彼の家の養素齋で酒をくみかわしたのである。載之は以前から、病氣で、醫者に酒を止められていた。だが、集まつた人々はすべて名士であり、しかも樂籍も京國の舊^{たふ}であつたのだ。酒もゆきわたり、談話も

金末の士風と元曲（高橋）

とびかうあり様で、皆それぞれ、さかづきを手に乾杯したのである。『遺山先生文集』卷二十九「故帥閻侯墓表」

ここに記述される人物の中で、張聖予・句龍英孺・劉文季は、いずれも元好問と亡國をともにし、耶律楚材に宛てた手紙にその名を記された遺民達である。張聖俞、名は伯適、號は新軒、金朝時代から名を知られた詩人であつた。

また句龍英孺は、名を瀛といい、「性は方直にして、詩名を有し、『述姓譜』という著述で知られた」（『秋澗先生大全文集』卷五十九「碑陰先友」）人であつた。劉文季は名を郁、『歸潛志』で有名な

劉祁の實弟であり、やはり遺民中の名士だったのである。

田仲德は、名を文鼎、號を蒙軒、王惲の記述によれば、死に際し「古より今まで、才有るも不遇にして溝壑に竄^{ひそ}り死すは、豈に獨り余のみならんや。是れ當に吾が衷に戚戚とすべき所に非ず」（『秋澗先生大全文集』卷四十九「大元故蒙軒先生田公墓誌銘」）と語つたという。義命に安んじた人物だったのである。その彼等が、一二四一年の正月、東平につどつた折、樂籍（つまり歌妓などの伶人）をも同席させたのであり、またその樂籍は「京國の舊」（つまり金朝以來の名妓等）でもあつたのだ。こうし

た報告は、士人達が歌妓に親しむ風が、已に金朝時代からあったことを明瞭に示していると思われるのだが、この場合それ以上に重要なのは、彼等の處世のあり方である。

元好問は、たとえば張聖俞について次のように記述する。彼は若い頃から「滑稽玩世」の人であった。……しかる

に、金朝は南遷して久しく、命運も傾き、民風國勢、いづれも太息して涙すべきものがあつた。したがって彼の詩も激情に満ちたことばとなっているのである。（『遺山

先生文集』卷三十六「新軒樂府引」）

張聖俞も杜仁傑同様、「滑稽玩世」といった生活態度を示した人だった。その彼は、また同時に、蒙古要人の招聘を受ければ、それに應じて北上する人物でもあつたのである。

東平にて張聖與の北行を送る

天山曾望使車還 天山曾つて使車の還るを望みしに
官柳青青此重攀 官柳の青青たるを此に重ねて攀る
去國衣冠元易感 去國の衣冠は元と感じ易く
中年親友更相關 中年の親友と更に相い關わらん

繡雲自可無千里

雲を繡むは自から千里無かる可く

隱霧難教見一斑

霧に隱されて一斑を見教め難し

海內文章在公等

海内の文章は公等在于

不應空老道途間

應に空しく道途の間に老ゆべからず

（『遺山先生文集』卷九）

「滑稽玩世」的生活態度を示した人物が、蒙古要人の招聘を受ければ應じるという、一般的通念からすれば矛盾するが如く見えるこの二面性は、次章でも多少言及するが、この時代に於ける限り決して兩立し得ないことではなかった。それはちょうど、嚴忠濟が「玩世」的處世を見せながら、一面忠義の人であつたかもしれないことに相通じる現象でもある。

また、同じく元好問の作品に、「代りて仲經の親しむ所に贈る」という詞がある。

「攤破浣溪沙」錦瑟華年燕子樓 楚雲湘雨等閑休 留在
貞元供奉曲 儘風流 約略睡痕妝鏡晚 留連香韻瑣窗
秋 總道竹西歌吹好 去來休
錦瑟の一弦一柱にその華やかさをしのぶばかりの、妙齡

の歌妓よ。楚雲湘雨なす二人の歡會も、うかうかする間に終りとなった。供奉曲に時めいた唐の貞元の、宮中のあの華やかさが今もあれば、お前は、そのあだな姿をほしいままにしたことだろう。寝亂れた姿をおもむろに鏡に照らす夕、かおる色香にためらいがちに窗邊に寄る秋。いづれ、杜牧が竹西路で聞いたという揚州の歌妓達の、あの美しい歌舞音曲がお前にあるのだから、二人の仲も成行きにまかす他あるまい。

これが妓女に贈られた△詞▽であることは、恐らく何ら疑いを容れないだろう。

この仲經という人物も、楚材宛の手紙に名が見える金の遺民であり、姓は張、名は之純、一名澄ともいい、橘軒と號した詩人である。亡國後はやはり東平に流寓したが、金朝時代には内郷に於いて元好問・杜仁傑・麻革等と詩をたたかわせた仲でもあった。また、彼の子は張孔孫⁽⁴⁵⁾（字は夢符）という元初の名臣であって、現存はしなが散曲の作者でもあったらしい。

元好問は、張仲經のことを次のように記述する。

金末の士風と元曲（高橋）

私が内郷に赴任した時、張仲經は杜仁傑・麻革・高信卿・康仲寧等とともに、家族をひきつれて内郷にやってきた。その頃は、劉光甫が鄧州の役所をちょうどやめた時分だったので、皆で詩や文章を書いたものである。……

亡國の後北渡し、彼は東平に身を寄せたのであるが、行臺公嚴實に謁し、一目でその人物を見込まれた。師賓の禮をもって待遇され、住いとして長清の別墅（金の遺民が多くここに居を與えられたと思われる）を與えられたのである。彼の性格は樂易、進取に恬淡であった。その態度には公私にわたりにじみでる穩やかさがあった。人と交わる上でも、約束をよく守り、分義にあつく、終始たよれる人であった。丙午（一二四六年）以來、彼は東平幕府の軍事に携わることになったが、……能力を發揮する前に病にたおれたのである。（『遺山先生文集』卷三十七「張仲經詩集序」）

この記述の中にも、張聖俞の場合と同様、ある種の二面性を讀み取ることが可能かもしれない。無論、張仲經は、「玩世」的態度を見せた張聖俞や杜仁傑といった人物とは

必ずしも道を同じくしなかった人であろうが、それにしても、「進取に恬淡」たろうとする點に於いては、恐らく近似した心性を示した詩人であった。その彼は、一方で歌妓に親しみ、また、亡國後は東平幕官となった人物でもあったのである。常識的な考え方からすれば、これはやはり、生活心情と處世の、一種の矛盾とすることが可能なのである。

そして、張仲經が分義にあつく東平嚴氏に仕えた人物だったとしても、この時代の東平にあっては、それがただちに杜仁傑等との心理的な血縁を否定するものではなかった。むしろ彼等は、處世の違いを越え、終生かわらぬ共感で結ばれていたのであって、この場合それがかえって、東平の士風の二面性を例證することにもなっているのである。というのも、張仲經の死に際し、杜仁傑は次のような手紙を友人の楊春卿に贈っているからである。

……亡國をむかへ北渡して以來、仲經の文章は大いに進歩した。そのうえ、彼の地位も、拔擢され大いに進んだ。私が思うに、彼がもしも十年長生きをしていたら、そ

の業績も古人に劣らぬものがあつただろう。今彼はにわかにこの世を去った。それが幸か不幸かは、天下に自から公論もあろう。しかしそれは、わたしのあえていうべきものではない。（杜仁傑「與楊春卿書」・孫楷第『元曲家攷略』梁進之の條所收）

杜仁傑は、自らが「古人に劣らぬ業績を残す」ことを決して望まなかった。また、その希望通り、亡國後彼は誰にも仕えなかったという。一方張仲經は、その最晩年の一年程度を嚴氏の幕官として過した。彼等は、その限りに於いてはやはり道を異にしていたといえようが、この文章に明らかになく、二人の友情に終生變わらぬものがあつたことも確かなのである。二人の共感を決定付けたものに、或いは、亡國をともした遺民としての連帶感があつたのかもしれない。が、いづれにしても、二人のこの共感と處世の違いにこそ、東平の士風の二面性がある意味で示されているといつてよいだろう。元初の東平には、「出でて仕える」といふ「玩世」的生活態度を示すことと、どちらをも容認する興味深い氣風があつたのである。

また、もう一人、金朝最大の巨公王若虛（字は從之）が、その死の直前に東平との關係をもったことが『遺山先生文集』卷十九「内翰王公墓表」に明らかである。そして王若虛も、東平の土風を代表するに足る、歌妓を愛し「滑稽」に遊んだ人物であった。

王從之は、その性格は樂易、かどを立てない人格者であった。……「滑稽多智」の人であったが、雅重の態度をくずすことはなかった。（元好問『中州集』卷六）

また、

王從之は顔がいかめしく、親しむべからざるが若きであつたが、狎笑を好み、酒の席での話には味わい淺からぬものがあつた。一方、同じ翰林の崔伯善は吝嗇で、家に居る時はただ蔬食を常とした。だから翰林院の面々は次のように言つたものである。「崔伯善は肉があつても食はず、王從之は花さえあれば酒を飲む。崔伯善殿、肉があつても食べぬとは、一體何を思つてのことなのか。王從之殿、花さえあれば酒を飲むとは、一體誰が彼をそこまで甘やかしたか。……」。（劉祁『歸潛志』卷九）

金末の土風と元曲（高橋）

金朝きつての考證學者王若虛からはおよそ想像もつかない一面であるが、元好問と劉祁の二人が彼を「滑稽」の人として規定しているのだから、これらの記述は強ち僞りではなかつた。しかも、この王若虛に於いても、考證學者としての「雅重」の面と、「滑稽」といった一面とが彼の中に同居していたのであり、時に元曲などに手を染めてはめはずしかなれないといった元初の土人獨特の氣風が、已に抜き難く示されているのである。

三 金末の土風

そもそも、金末の土人社會を特徴づけているものは、なんといいてもその閉塞性にあるといつてよい。歴史的・社會的事情についての説明は、本稿の目的ではないから詳述は避けるが、概略のみを述べるとすれば、凡そ次のようになるだろう。

金末土人社會を閉塞的なものにした原因は、大きく言つて二つあつた。一つは外的な要因であり、一つは内的な要因である。外的要因とは、金朝が版圖の多くを失ひ、蒙古

・南宋・西夏三國の脅威に晒されることによって、國家そのものの形體を破壊されつつあったことである。内的要因とは、金朝内部に女真人と漢人の民族的對立が渦まき、國家の危機に焦燥を感じる士人層の仕路を、そうした對立が實質的に塞いでいたことである。

さて、こうした士人社會の閉塞性は、當然のことながら彼等の士風を大きく歪めていったと言つてよかつた。そのことは恐らく、李純甫という人物の人生に、最も典型的に示されているだろう。

李純甫、字は之純、號は屏山。儒・佛・道のすべてに通じ、當時にあつては最も名を知られたこの哲學者は、已に南遷以前から金朝滅亡を豫感した人だった。

泰和の頃、金朝は安泰で、士大夫達は宴飲を常としていた時に、李純甫は、友人と酒を飲んでも深く思い、ひとりごとをいい、旦夕の憂を懷くが如くであつた。友人がその故を問うと彼は答えるのである。「女真という一族が立てた金朝が、今また新たに蒙古の侵略を受けようとしているのに、我々は彼等の司令部の位置も知らない。

漢民族は、異民族にすっかり料理されてしまふに違いない」。これを聞いたものは嘲笑して、「五六十年あまりも太平の世が續き、この百年間、犬が吠えるほどの事件すらない時に、君はそれを樂しみもせず、それどころかこんな妖言を吐くのか」というのだった。しばらくして蒙古の侵攻があり、李純甫は從軍して歸つてきた。もう手の下しようのないのを知つて、彼にはもう仕進の意もなく、酒びたりとなり、一日も飲まない日がなく、飲めば必ず酔っぱらつた。この世を笑いとばし、遊ぶにも足らぬとしたのである。『遺山先生文集』卷二十一「希顔墓銘」

李純甫が仕進の意をなくし、酒にひたり「玩世」的態度に傾斜していったのは、この文章を見る限り、危機的状況の中での屈折があつたからだと思われる。このように伝えられる李純甫は、南遷後更に屈折し、精神的にも孤立したみじめな晩年を送つたのである。

李屏山はその晩年、猜疑心が強く、しかもおびえていた。もともとは、後進にすぐれた人物がいれば、それを手馴付け、かわいがつたものである。だから雷淵などもその

門下生であつたが、李屏山は後に、その雷淵が氣焰を吐くを見て、自分が害せられるのではないかと疑い、會うのを畏れた。一度など、雷淵の罪過を敷えたと通告文まで書いたくらいであつたが、結局は焼いてしまった。また、李欽止や劉光甫はみな李屏山を推賞したのに、彼の方では、「李欽止は何でも鋭く見抜きし、劉光甫は口が實になつしゃだ」と言つて、彼等を畏れた。彼は私に語つたことがある。「李欽止のあの目、雷淵のあの髯、劉光甫のあの牙、これらはみな實に畏る可きだよ」と。私は父と、この話をしては笑つたものである。『歸潛志』

卷十

李純甫のこの精神的孤立は、最も極端な例であつたかもしれない。彼の場合、問題はむしろ精神病理學的範疇にあると言えるかもしれないのだが、いづれにしても、彼の生きた時代狀況は他の士人達も共有していたのであり、また、彼と類似した精神的孤立を示す例は他にいくつもあるものであつて、その點からすれば、この李屏山こそ當時の士風を典型的に示す人物といつてよいだろう。

金末の士風と元曲（高橋）

たとえば、李屏山がその髯を畏れた雷淵（字は希顔）なども、孤立した士人のよい例なのである。

雷淵は我慢ならぬことがあると、憎惡の氣持が顔にありありと現われ、齒を喰いしばつて相手をたて續けに罵るのであつた。そうした性格が自身の人生を挫折させていくのだと判つていたが、改めることができなかった。

……彼は平生、孔融・田疇・陳元龍の人と爲りを慕い、人もまた彼をそうした古人に通じる人だと期待した。彼の文章は當代隨一のものであつたけれども、彼にとつては、單に餘事に過ぎなかつたのである。『遺山先生文集』

卷二十一「希顔墓銘」

雷淵のこの激情も、彼が有爲の人であつたにもかかわらず、文章をもつて翰林という小さな漢人世界に閉じこもるしかなかった心理的屈折の結果現われたものと思われる。そしてこの激情が彼をいかに孤立させていたかは、「雷淵が死んだ時、遺山が墓銘を書いただけで、墓誌や挽詩を書いた人は誰もいなかった」という『歸潛志』卷十の記述によつても充分確認し得るだろう。

一體に、この時代の士人社會は、李屏山や雷淵の如き狷介の士を多く輩出したのだった。それら狷介の士達は、獨善的で排他的な態度を多く示しはしたが、當時の氣風はまた一方で、これら狷介の士を大いに尊重してもいたのである。たとえば元好問の師や友人は、郝天挺・辛愿・李長源など、ほとんどはこの狷介の士であつたが、元好問自身がこの狷介の士をいかに尊重したかは、彼の著わした元氏一族の傳記に如實に示されているといつてよいだろう。

再試^あするも中らざるに及び、意は殊に自得せず。又、婦人を娶るも諧^なまず、日々惡語を致す。遂に狷介を以て疾を得。〔遺山先生文集〕卷二十五「敏之兄墓銘」

また、

群衆^あも其の介を易うる能わず、一物も其の志を屈する能わず。生まれて養う所以を知り、歿して順う所以を知る。古の特立獨行、世を輕んじ志を肆^はにし、隱居放言するの君子たり。是の如くして止む。没して書かざるは、族黨^あの過^あ。乃ち追いてこの銘を爲す。〔遺山先生文集〕卷二

十五「族祖處士墓銘」

元好問その人がいかなる人物だったかは別問題だとしても、彼が狷介の士を深く尊重したことは明らかだと言えるだろう。そしてこの狷介の士達は、「特立獨行、輕世肆志、隱居放言」といった中國の傳統的思考方式と結び付いて、超越的な思想傾向をも育んでいたのだった。

總體的にいつて、金末の士人達は仕路に就くことを輕んずる氣風が強いといつて過言ではない。ただ、南遷に隨つた士人達は、仕路（『金朝』）を否定したにしろ、それに替る新しい生活の場があつたわけではなかったから、多くの場合は金朝を超克し、自ら精神的優位に立つ方向にむかわざるを得なかった。金朝を否定し拒否するのではなく、精神的に超克してしまうこと、ただ生活の場としてのみ金朝を認めること、それが金末の士人達に支配的な感情であつたと思われる。つまり、仕路に就くことを輕んずるとは、決して仕路を拒否することではなく、むしろ精神生活の内でのその占める位置を小さくすることに他ならなかったのである。そうした感情を助け、是認させていったのが、金朝に見られる陶淵明の尊重であり、もっと廣く言えば、蘇學

の傳統でもあったが、この時代は、全眞教などの新興道教が榮えた時代でもあり、そうした新興宗教も、彼等のこうした感情を助長した重要な要素でもあっただろう。

ただし、全體的に見るならば、金末のこうした氣風は實に捉え難い複雑な現われ方をする。というのも、たとえば元好問にしても、彼は「女眞」という言葉を彼の文章から抹殺した詩人であったが、また、亡國の悲しみを靜かに燃焼させる喪亂詩の作者でもあったのだ。超越的感情をその詩に歌い續けながら、極度に生々しい一生を送り續けた人物でもあった。つまり、彼等の屈折と孤立は、一方では激しく金朝を拒絶しながら、またもう一方では、金朝による自身の立場の安定を希求してやまなかったと言えるだろう。其の出處を論じて以爲えらく、仕宦は本と、志を得て其の知る所を行い、以って斯民を濟うを求む。進みて行う能わざる或れば、居高養蒙し、行樂自適して、世網の羈ぐ所と爲らざるに若かず。『歸潛志』卷三

と劉祁が記述した王鬱は、また一面、喪亂に落命した節義の人でもあった。そして劉祁自身は、こうした氣風を彼な

りに要約して、更に次のようにも記述する。

金朝が南遷して以來、宣宗は胥吏を重用して士大夫を抑えつけた。敢爲敢言の氣慨ある者達はしりぞけられたのである。だから、當時の高官連は、多くはいじけてしまい、罪を免れることばかりに汲汲として、おもねるだけだった。金朝滅亡に際しても、一人として死節を貫いた士大夫はいなかったのだ。これは無論、金朝自らが招いた事態だったのである。だから私は言うのである、士氣は素より養わざる可からず、と。『歸潛志』卷七

こう記述する劉祁は、亡國の後自身を隱者と規定しながら、所謂「戊戌の選試」(二三八年、蒙古が行った科擧)に應じて新體制に仕えることとなった。金末の彼等の孤立は、彼等の多くを狷介の士たらしめ、時に超越的志操を懷かせた。そしてそれがあったからこそ、彼等は亡國をむかえても金朝を容易に乗り越え、新體制の中に新しい生活の場を見出したのである。これは、金の遺民の多くに共通する事情であつたろうし、また、こうした面にこそ東平の士風が見せた二面性の原型があつたと考えられるのである。

四 金末の士風と元曲

このような金末士人層の屈折は、結果的には、彼等の間に「滑稽」や毒舌を愛好する氣風を育んだと見て、まずあやまりはないであろう。「滑稽」とは、『史記』『滑稽列傳』の序に、「談言微^{あた}に中れば、亦た以て紛を解く可し」という如く、本來、單に人を笑わせる言説のみを指すものではなかった。それは、毒舌や皮肉（中國の傳統的な言い方に從えば「諷諫」とも言えるだろう）といった概念をも、當然その範疇に含むものであつて、その意味からすれば、直言することを放棄した士人層が屈折の果に到達し得る、謂わば心理的韜晦の場であつたとも考えられるのである。そして、金末の士人の傳記のあちらこちらに、この「滑稽」という傳統的表現が散見されるのは、恐らく、彼等の「滑稽」がある種の屈折の結果成立したものだからに他あるまい。現に、前掲の張聖俞については、「滑稽玩世」という處世態度が時代の不幸とともに記述されていたのであるし、また元好問は、李通（字は平甫、號は寄庵）の傳記

記述に於いても、

「人と爲り滑稽多智」という記述と、

中^御ごろ大變に値^あり、世事の爲す可き無きを知りぬ。故に一切、蒙晦を以て自ら居る。『遼山先生文集』卷十七「寄庵先生墓碑」

といった記述を併存させてもいるのである。更にまた、記述者の元好問その人が、已に「滑稽」の人であつた。それについては興味ある逸話があるので、ここに紹介しておく。

元好問と李汾（字は長源）は同郷で、ともに名の知られた詩人であつた。二人は、詩名が相い拮抗していたので折り合がよくない。李汾は激情を好み、元好問はそれを評して「彼の激情は常識を逸脱するものがある」といった。一方、元好問は滑稽を愛した。すると李汾は、それを詩をもつて嘲罵し、さすがの元好問もどうすることもできなかったのである。（『歸潛志』卷九）

つまり、毒舌の人李汾と、「滑稽」の人元好問とは、劉祁の記述によれば甚だ折り合が悪かつたというのである。

しかるに、元好問自身は李汾と彼との關係を劉祁のように捉えていなかったといつてよい。というのも、『中州集』によれば、李汾は元好問の「三知己」の一人となっているのであって、『歸潛志』の記述する所と大いに矛盾しているからである。こうした矛盾は、無論色々な原因が考えられるが、基本的には、「滑稽」と毒舌の異った局面と共通する局面とが象徴的に示されているように思われる。毒舌とは、彼等の屈折のより直接的な發露であり、「滑稽」は恐らくより間接的な發露だったのであって、表面的には互いに對立關係にあつたとしても、兩者は實に深い血縁で結ばれていたと考えられるのである。

また、「滑稽」と毒舌の血縁をより直接的に證し得るのは、次に示す李屏山や雷淵の逸話であろう。

李屏山は趙秉文を先輩として尊んだが、……文章の上では趙に對して少しも遠慮せず、醉はらつては、みだりに彼を中傷した。趙秉文は怒りはしたが、手の施しようがなかつたのである。趙秉文が西夏に刺史として赴いた折など、李屏山は次のような詩を書いて送別の詩とした。

金末の士風と元曲（高橋）

百錢一匹絹 百錢一匹の絹

留作寒儒裋よんどし 留めて寒儒の裋と作す

これは、趙が安易に墨跡を人に與えることを揶揄したものである。また、李は次のような詩を書いたこともある。

一婢醜如鬼 一婢醜きこと鬼の如し

老腳不作溫 老腳して溫すら作さず

これは、趙の侍妾を揶揄したものであった。

また、

許州に蘇嗣之⁶⁴というものがいた。東坡の後裔ということだったが、恐らくは、子由が長く潁川に居たから、その族で南渡しなかつた者であろう。彼はおろかな奴で、財に富み、金で官を買ひ權要にとり入っていた。衣が短かく、女眞の士大夫達（權要）は多くそれを笑つたものだが、それも彼がデブであつたせいなのだ。人々は彼を蘇胖と呼んだ。私が雷淵と話をしていた時、彼の話となつた。雷淵は、「夜、水牛がたおれるという話を知っているか」という。私が「知らぬ」というと、雷はこう語つた。「東坡が生まれて、一晚にして眉山の草木はことごとく

死んでしまったが、今、蘇胖そぷが生まれ、一晩で鄭村の水牛がことごとく死んでしまったのだ」と。實におもしろい話である。(『歸潛志』卷九)

李屏山や雷淵といった人物は、既述の如く、金末士人社會の屈折を典型的に示した狷介の士であつたが、彼等は同時に、こうした「滑稽」(『毒舌』)の人でもあつたのである。このような記述を考えあわせる時、彼等の「滑稽」(『毒舌』)がやはり時代の刻印であつたことは、もはや何の異論もない所と思われる。

そして、ここで最も重要なのは、「滑稽」を愛好するこの氣風が、士人層と元曲を結び付ける要因に實はなつてゐたと思われる點であろう。なぜなら、彼等の「滑稽」は、「不出而仕」という傳統的處世のわく組みをいったん踏み越えさえすれば、決して徒花あだに終ることのない、諷刺詩としての確かな視座と形式を獲得するに到るであろうからである。しかも、後の元曲の隆盛を豫告し得る一つの成果を金末には生みつつあつたことを、『歸潛志』卷九の次の記述によつて、我々はある程度確認することが可能なのであ

る。

麻徵君知幾あせ(名は九疇)が南州にいた頃、世は擾擾として亂れ、税はこと細かに徴收されて、人々は安らぐ暇もなかった。それを見た彼は、雨中行人扇圖に次のような詩を題したのである。

幸自山東無稅賦

もし山東に稅賦の催促もないのであれば

何須雨里太倉黃

雨の中、どうしてこんなにあくせくするものか

尋思此箇人間世

今の世間を思つてみれば人を畫いても大あわて

畫出人來也著忙

一時のたわむれの作ではあるが、味わいある詩である。

彼が今日の狀況を見れば、またどんな詩を書くことであろう。麻知幾はまた、太公釣魚圖に次のような詩を題した。

向使文王不獵賢

もしも文王が賢者をさがし求めねば

一竿潦倒渭河邊

竿を片手に、太公望、渭水のほと

りに老いぼれる

當時若早隨時世

その時、つとに時世につきあえば

直喫羊羔八十年

太公望、うまざけ羊羔をくらうどころか

高利の羊羔かみかき八十年もくらいつばな

し

この詩も、時の惡弊を言いてたものだった。また、ある道士がこの圖に次のような詩を題したらしい。

太公壽命八十餘

太公望の壽命は八十餘

文王一見便同車

文王は彼を一目見て同車とやら

而今若有儲溪客

今どき儲溪に釣するものでもいれ

ば

也被官中要納魚

役所へつれていかれて、釣った魚

をしぼりとられるのがおちという

もの

俚語を用いた詩ではあるが、時世がいかなるものだったか、よく理解できるのである。

麻九疇、字は知幾。徵君とは、當時の巨公趙秉文が若輩の彼を敬愛してそう呼んだものらしい。また彼は、そう呼

ばれるにふさわしい高潔の人であり、金の末年、徴されて

も仕えなかったという。元好問の記述によれば、三歳にし

て字を覚え、七歳にして草書をよくした「神童」であった

ともいう。もっとも、『中州集』におさめる彼の詩三十一

首の中には、この『歸潛志』が記述するような、「滑稽」

を旨とする口語的な諷刺詩は一首もなく、また、彼が「滑

稽」を愛好したという記述も見あたらないのであって、し

たがって、彼を「滑稽玩世」的態度を示した杜仁傑のよう

な人物と同様に論じることが無論さしひかえねばならない

だろう。しかしながら、翻って言えば、「滑稽」を標榜せ

ぬ麻九疇の如き人物がこうした口語的諷刺詩を書いた點に

こそ、實は當時の士風が端的に示されているといつて過言

ではないのである。しかもまた、彼の詩は、金末の士風と

元曲の關係を考える上で貴重な示唆を與えてくれるとも思

われるのである。それは單に、これらの詩が口語的な嘲諷

詩であったからという點にとどまらず、一種の社會詩とし

て、發想の點で元曲との近似性を示していると思われるか

らである。

そもそも元曲は、廣範に俗語を用いた點にのみ、そのレゾンデールがあるのではなかった。元曲をして前代の口語文學と一線を畫さしめているものは、その壓倒的な量もさることながら、口語のもつ現實に密着した發想を、「詠物詩」的視座から、一種の形式にまで昇華し得た點にある。元曲を、この「詠物詩」という側面からみごとに解析したのは、田中謙二博士の「元代散曲の研究」『東方學報』第四十冊）という優れた論考であつたが、今、氏の分析法をかりつつこの麻九疇等の詩を考察すれば、凡そ次のように考へることが可能であらう。

麻九疇等の詩が顯著に「詠物詩」的であるのは、先ずなによりその題材の設定にあるといつてよい。これらの詩は、いづれもが繪畫の題詠という形をとっているのだが、△繪畫の題詠△というスタイルといい、また、テーマといい、それは傳統文學と元曲とを問わず愛好された、最も類型的な題詠法だったのである。しかるに、これらの詩が切り開いた世界は、傳統的價值とは無縁の、甚だ現實的なものでもあつた。「今の世を思つてみれば、人を畫いても大あわ

て」といい、「羊羔うまぎしくらうどころか、高利の羊羔かねかし八十年もくらいつばなし」といい、「釣つた魚をしぼりとられるのがおちというもの」といい、いづれも、社會への鋭い諷刺を含む嘲諷の世界だったのである。無論これは、「雨中行人」「太公釣魚」どちらにしても、傳統的な枯淡の世界があるからこそ、それをバネとして時代を浮彫りにする諷刺の刃を發揮することが可能だったのである。つまり、傳統美の世界を、「詠物詩」的觀點から百八十度轉回させて今の世の現實を照射してみせたからこそ、口語のもつ現實感が十分活用されてもいるのである。これは已に、社會に對する自覺的な「滑稽」の世界といつてよい。

こうした世界は、後の元曲の、

冬景

蘇彥文

……〔越調紫花兒序〕這雪袁安難臥 蒙正回客 買臣還家 退之不愛 浩然休誇 眞佳 江上漁翁罷了釣槎 便休題晚來堪畫 休強呵映雪讀書 且免了這掃雪烹茶
〔尾聲〕最怕的是簷前頭倒把冰錐掛 喜端午愁逢臘八 巧手匠雪獅兒一千般成 我盼的是盼牛兒四九裏打

この雪では袁安どのも寝ておれまい、呂蒙正どのも乞食小屋へ引きあげ、朱買臣どのもお歸りだろ、韓退之どのも雪景色をめではおれまい。孟浩然どのもご自慢やめよう。げにもめでたや、大川べりの漁^{いさ}り翁も釣り舟たたむ。雪の夕べは繪にかきたやと、歌詠むことなど止めなされ。雪あかりのお勉強、やれ無理しなさんな。雪掃きよせて茶の湯たてる、あの風流ごともまっぴらだ。

なによりおっかないのは、軒端から垂れさがった氷の錐^{こし}。端午の節句はうれしいものだが、こわい臘八節句を迎え、器用な職人うでをふるい、つくる雪だるまいろいろさまさま。わたしが待つのは土の牛を、四九が三十六むち打つ日。(譯は、平凡社「中國古典文學大系」二十『宋代詞集』二百五十七ページ、田中謙二博士によるもの)

といった世界を、已に十分豫告するものといつて過言ではあるまい。口語が、單なる惡ふぎに脱するのではなく、狼狽に走るのでもない。また、口語のみの題材を選別し、その世界に閉じこめるのでもなく、傳統文學の世界を口語に置きかえるだけでもなかったのである。そうではなく、

傳統文學の世界を口語によって裏がえし、しかも揶揄嘲笑することによって視座そのものを轉回し、現實をよりリアルに捉えることに成功しているのである。たとえば、散曲の傑作「高祖還鄉」に見られる痛烈きわまる價値の轉倒は、麻九疇等のこうした詩の延長線上に、實に正確に位置付けることが可能なものではあるまいか。

金朝の文化に關わる資料は、周知の如く實にとぼしい。したがって、當時の「滑稽」が口語文學といかなる關係をもちえたかを檢證し得る材料は、殘念ながらもはや何一つ殘されてはいない。ただし、當時の士人が口語に對していかなる考えをもっていたかはある程度知り得るのであって、それを次に引用しておこう。

「^詞いたたい詩というものは、もともと喜怒哀樂の情を發したものである。もし讀者になんら感動も與えないなら、それは詩でない。わたしがみるところ、後代の詩人の詩はいずれも表現の彫琢をきわめたり、學問をもちこんだりして、いかにもりっぱではあるが、讀者を感動させる

ことができない。そんなものになんの價值がある。だから、わたくしは亡き友王飛伯（名は鬱）にかけて次のごとく話した、「唐代以前の詩は詩に在り、宋代になるとだいたひ長短句（詞）に在り、いまの詩は民間の俚曲に在る。いわゆる『源上令』の類がそれだ」。飛伯はいった、「どうしてそうだとわかる」。わたくしがいった、「古人の詩歌はみな心中のいいたいことをぶちまけたものだから、口ずさむと涙が出てくるものさもある。いまの人の詩は題目とか事實とか句法とかに拘泥して、目あたらしい技巧で評判をえようとする。人の口には合うが心を搔さぶるものはほとんどない。むしろ、俗謡・俚曲のほうが眞情を吐露して、讀者の血の氣をかきたてる力があるのだ」。飛伯はもっともだといってくれた。『歸潛志』卷十三、譯は、田中謙二博士「元代散曲の研究」二十五ページによる）

この文章に明らかな如く、劉祁は、文學に於ける口語の役割を積極的に位置付けようとしているのである。無論、劉祁のこうした考え方が當時どれくらい一般的であったかは、今日全く知り得る所でなく、また、彼の見解それ自體

も、嘲諷の刃としての口語を容認しようとするものでは恐らくなかっただろう。その點からすれば、彼の意見を後の元曲の隆盛に直接關連付けて考えることは、やはり不可能なのかもしれない。しかしながら金朝は、『董解元西廂記』などによって明らかな如く、民間の口語文藝がある程度のレベルに達した時代でもあった。その金朝に於いて、士人層に口語を擁護する意見があり、また、「滑稽」を愛好する氣風が色濃く示されていたとすれば、元曲作家となった士人達と同様の氣風を已に金末士人社會が有していたとしても、強ちあやまりではないと思われる。

五 結 語

元曲と士人層を結び付けた要因について、今日まで諸家が提出した定見をまとめるとすれば、凡そ次の諸點となるであろう。

- 第一に、異民族征服王朝が音楽を愛好し庇護したこと、
- 第二に、科擧の廢止などによって儒教勢力が一時的に退潮したこと、

第三に、口語文學がある程度に成熟し、士人の間からそれ等を是認し發展させる自覺の氣運が生まれたことである。これら三點は、いずれも元朝という特殊な社會を念頭に置いた意見だといってよい。元朝は、士人層を階層として決定付ける諸要素が確かに大きく變質した時代でもあった。そして、そうした社會情勢の變化なくしては、口語文學が時代の土風を體現するという事態も、恐らくおこり得なかつたのである。これらの意見は、やはり認められてしかるべきものといえるだろう。

が一方で、少ない資料から私の得た印象として、元朝社會と近似した事情が、已に金朝社會にあつたことも、恐らく是認されてよいことなのである。現に、女真人が音樂を愛好し庇護したことは、つとに先賢の指摘する所（吉川幸次郎全集十四卷「元雜劇」六十三頁）であつたし、また、金末の朝廷が士人層を必ずしも尊重しなかつたことは、『歸潛志』の再三にわたつて説く所でもあつた。

甚しき哉、風俗の人を移すや。南渡の後吏權大いに盛にして、高珙相となり法を定めてより、其の遷轉は進士と

金末の土風と元曲（高橋）

等しく、甚しきは、反つて焉（これ）より疾し。故に一時の人、争つて此を以て進む。士大夫の家と雖も、子弟の讀書往往終えざる有り。……其の子弟の輩、既に此の業（胥吏のそれ）を習えば、便ち進士と讎を爲し、其の趨進舉止、全て吏曹（なま）に學う。『歸潛志』卷七

無論、金末に科擧の制度が廢止されることはなかつたし、士人の多くは依然として科擧の學に勵んでいたが、しかし、この記述を見ても明らかな如く、科擧に應じることが榮達への捷徑でなかつたことも、また確かなことなのである。金末社會は、元朝と同様胥吏が重用された。そして、榮達を望む人々の多くは、情實をもつてこの道に進みもしたのである。また、極端な場合には、せつかく科擧に合格しながらも、胥吏と同様にあつかわれることを厭しとしなければ、十數年間無官のまま放置されることもあつた。當時の士人達は、元曲にもよく使われる成語

十年窗下無人問 十年窗下人の問う無きも

一舉成名天下知 一舉、名を成し天下に知らる

の文句を入れ換えて、「一舉、名を成し天下に知らるるも、

十年窗下人の問う無し」とした、という話も同じく『歸潛志』卷七に記述されている。科擧を根幹として成立する士人社會は、已に金末には深刻な危機に瀕していたといつてよいだろう。

そして、この金末の士人達が「滑稽」を愛好する「玩世」的で華やかな氣風をもっていたことは、已に検討した通りであった。しかも彼等は、「滑稽」の發露として、元曲に近似した發想をもつ諷刺詩も生んでいたのである。金末の士人社會は、元朝のそれと同様の事情を已に十分かかえていたのであり、また同時に、彼等の氣風それ自體も、元初のとそれと何ら選ぶ所のないものだったように思われる。したがって、私の見る限り、亡國という經驗が彼等の氣風をどの程度變えたか、甚だ疑問視せざるを得ないのである。

そしてまた、散曲作家となった遺民達にしても、彼等と散曲とを結び付けた契機を亡國に求めることは、必ずしも妥當ではないように思われる。なぜなら、彼等の處世と作品は、金末の氣風の反映に他ならなかったからである。無論、彼等の作品がいつ書かれたかは、今日全く明らかでは

ない。しかしながら、彼等の人生や作品が金末士人社會からの逸脱ではなかった以上、作品それ自體も、金朝時代に生みだされていた可能性は十分あるように思われる。

(了)

註

- (1) 馬致遠、大都人。號東籬老。江浙省務提舉。〔錄鬼簿〕卷上)
- (2) 范文正公鎮鄆陽、有書生獻詩甚工、文正禮之。書生自言、天下之至寒餓者、無在某右。時盛行歐陽率更書、薦福寺碑墨本直千錢。文正爲具紙墨、打千本、使售于京師。紙墨已具、一夕雷擊碎其碑。
- (3) 趙翰林周臣爲學士、楊之美爲禮部尙書。二公相得甚歡。蓋楊雖視趙進稍後且齒少、趙以其學問政事過人、雅重之。而楊事趙亦謹。正大初、朝廷以夏國爲北兵所廢、將立新主。以趙公年德俱高、且中朝名士、遂命入使冊之。既行、館閣諸公以爲、趙公此行必厚獲。蓋趙素清貧也。至界上朝議罷其事。飛驛卒遣追回。當驛卒之行也、楊公在禮部召至、授以一卷書、封印甚謹、諭以直至學士面前開拆。卒既至趙所、先授以省符、次白有禮部實封。趙公疑訝、不知爲何事。啓之乃楊公詩一首也。其詩云、中朝人物翰林才、金節煌煌使夏臺、馬上逢人唾珠玉、筆頭到處灑瓊瑰、三封書貸揚州命、半夜碑轟薦福雷、

自古書生多薄命、滿頭風雪卻廻來。趙公撫掌大笑。後朝野喧傳以爲笑談。

- (4) 我皇元初并海宇、而金之遺民若杜散人、白蘭谷、關已齋輩、皆不屑仕進、乃嘲風弄月、留連光景、庸俗易之、用世者嗤之。三君之心、困難識也。〔青樓集〕序)

- (5) 杜仁傑・商挺・張孔孫・徐琰については、後に簡単な説明を加えておいた。王修甫・李好古については、孫楷第氏『元曲家考略』に記述がある。その他、康進士・張子益・張時起などの作家も、東平の人であったことが當時の資料から確認される。

- (6) 『青樓集』、聶檀香の條に次のような記述がある。「姿色嫵媚、歌韻清圓。東平嚴侯甚愛之。」

- (7) 四方聞義而來依者。館無虛日。故東平人物視他鎮爲多。

- (8) 『元名臣事略』卷十「平章宋公」

- (9) 『元史』卷一百五十九に傳有り。

- (10) 『元史』卷一百六十「閻復傳」に次の記述がある。「時嚴實領東平行臺、招諸生肄進士業、迎元好問校試其文、預選者四人、復爲首、徐琰・李謙・孟祺次之」。この記述は『元名臣事略』によると思われるが、嚴實というのは誤りで、嚴忠濟でなければならぬ。

- (11) 杜善甫不屑仕進。遊嚴相之門。嚴乃濟南望族。善甫爲所敬重。一日、讒者間之、情分浸乖。杜謝以詩、……嚴悟、款密如初。時有掌兵官遠戍於外、其妻宴客笙歌終夕。善甫詩……、

金末の士風と元曲（高橋）

聞者快之。有薦之於朝、遂召之、表謝不赴。

- (12) 吉川幸次郎博士『元雜劇研究』（全集十四卷、百三十五頁）、「更にまた元末の戯文「宦門子弟錯立身」のなかには、「你課牙比不得杜善甫（そなたの輕口、杜善甫ほどには）」という文句がある。つまり芝居の歌にまで歌われるほどの洒落者であったのである。」

- (13) 及謝去大權、貴而能貧、安于義命。世以是多之。〔元史〕一百四十八「嚴實傳」

- (14) 辛丑元日、予方客東平、載之盛爲具召予、及大興張聖予・祁人宋文卿・東光句龍英儒・鎮人劉子新・太原崔君卿・渾源劉文季・壽春田仲德輩、飲于家之養素齋。載之先病于酒、醫者戒勿飲。然其致客皆名士、樂籍又京國之舊、飲既治、談諧問作、坐客無不滿引舉白者。

- (15) 從少日滑稽玩世、……時南狩已久、日薄西山、民風國勢、有可爲太息而流涕者。故又多憤而吐之之辭。

- (16) 『元史』卷一百七十四に傳有り。張孔孫が散曲の作者であったのは、『錄鬼簿』卷上「前輩名公樂章傳於世者」の條に、張夢符憲使の名があることによる。

- (17) 及予官西南、仲經偕杜仲梁・麻信之・高信卿・康仲寧・挈家就予內鄉。時劉內翰光甫方解鄧州倅、日得相從文字間。……北渡後、薄遊東平、謁先行臺嚴公、一見即被賞識、待以師賓之禮、授館于長清之別墅。……爲人資稟樂易、恬于進取、進退容止、皆有蘊藉可觀。與人交、重然諾、敦分義、終始可

以保任。……自丙午以後、參幕府軍事、……未一試而病不起矣。

(17) 之純自北渡歸、文筆大進、又且位以不次。不肖以爲、苟貸十年不死、其勳業行履不讓古人者。渠翻然謝世、幸與不幸、天下自有公論。非不肖所敢望。

この文章は、孫楷第氏『元曲家考略』の又引きで、出處が明らかでない。猶、孫楷第氏は、出處について次のように述べておられる。「孫德謙輯善夫先生集、載杜善夫與楊春卿書、不注出處、疑出中州啓劄」

(18) 今年春(一二四三年)、渾源劉文季當以事如東平。乃言於公(王若虛)之子恕、請御公而東。公始命駕焉。東平嚴侯(忠濟)榮公之來、率賓客參佐、置酒高會。公亦喜此州衣冠禮樂、有齊魯之舊。……

(19) 從之天資樂易、而不立崖岸、……滑稽多智、而以雅重自持。
(20) 王翰林從之貌嚴重、若不可親、然喜于狎笑、酒間風味不淺。崔翰林伯善儉嗇、家居止蔬食爲常。故院中爲之語曰、崔伯善有肉不餐、王從之無花不飲、崔伯善有肉不餐卻圖箇甚、王從之無花不飲誰慣了你來。……

(21) たとえば『歸潛志』卷十二「辭亡」は、次のように記述する。「高琪の政を執りてより、士大夫の氣を抑えて伸ぶるを得ざらしむ。……又、私族類に偏いて、漢人を疎外す。其の機密謀謨は、漢相と雖も預るを得ず。」

(22) 泰和中、朝廷無事、士大夫以宴飲爲常、之純於朋會中、或

堅坐深念、咄咄嗟喟、若有旦夕憂者。或問之故。之純曰、中原以一部族待朔方兵。然竟不知其牙帳所在。吾見華人爲所魚肉去矣。聞者訕笑之曰、四方承平、餘五六十年、百歲無狗吠之警、渠不以時自娛樂、乃妖言耶。未幾北方兵動、之純從軍還。知大事已去、無復仕進意、蕩然一放於酒、未嘗一日不飲、亦未嘗一飲不醉、談笑此世、若不足玩者。

(23) 李屏山晚年多疑畏。見後進中異常者、必摩撫之。雷公希顔本其門下士。後見其鋒銳氣勢、恐其害己、甚憚之。嘗爲檄以疏其過惡、已而焚之。李公欽止・劉公光甫、皆推挹屏山、然屏山以爲、李有鉤鉅、劉談論鋒出、皆憚之。嘗謂余曰、若欽止之目・希顔之髯・光甫之牙、皆可畏。余每與先子言以爲笑。

(24) 遇不平、則疾惡之氣見於顏間、或嚼齒大闢不休。雖痛自摧折、猝亦不能變也。……平生慕孔融・田疇・陳元龍爲人、而人亦以古人期之。故雖其文章號一代不數人、而在希顔、仍爲餘事耳。

(25) 及再試不中、意殊不自得。又娶婦不諧、日致惡語、遂以狷介得疾。

(26) 羣衆不能易其介、一物不能屈其志。生而知所以養、歿而知所以順。古之特立獨行、輕世肆志、隱居放言之君子。如是而止矣。沒而不書、族黨之過。乃追爲之銘。

(27) 全眞教をはじめとする新興道教と士人層との關係については、陳垣氏『南宋初河北新道教考』に詳しい。

(28) 元好問が女真人に冷淡であり、彼等について記述すること

を欲しなかつたことについては、藤枝見博士『征服王朝』に言及がある。

(29) 其論出處以爲、仕宦本求得志行其所知、以濟斯民。其或進而不能行、不若居高養蒙、行樂自適、不爲世網所羈。

(30) 南渡後、宣宗獎用胥吏、抑士大夫。凡有敢言者、多被斥逐。故一時在位者、多委靡、惟求免罪咎苟容。迨天興之變、士大夫無一人死節者。豈非有以致之歟。由是言之、士氣不可不素養也。

(31) 中值大變、知世事無可爲。故一切以蒙晦自居。

(32) 元裕之・李長源同鄉里、各有詩名。由其不相下、頗不相咸。李好憤怒。元嘗云、長源有憤擊經。元好滑稽、李輒以詩譏罵。元亦無如之何。

(33) 李屏山視趙閑閑爲丈人行、……于文字間、未嘗假借。或因醉嬾罵、雖愠亦無如之何。其往刺寧夏、嘗以詩送、有云、百錢一匹絹、留作寒儒裋。譏其多爲人寫字也。又云、一婢醜如鬼、老腳不作溫。譏其侍妾也。〔歸潛志〕卷九

(34) 許州有蘇嗣之者、云東坡後裔。蓋子由久居潁川、有族不南渡者也。其人頗蠢騷、富于財、以貨入官、交結權要。短衣女眞中士大夫多以爲笑。以其肥碩也。呼爲蘇胖。余嘗與雷希顏談及之。雷曰、頗聞夜僂水牛之說乎。余對不知也。雷曰、昔東坡生、一夕眉山草木盡死。今蘇胖生、一夕鄭村水牛盡死也。此可大笑。

(35) 麻徵君知幾在南州、見時事擾攘、其催科督賦如毛、百姓不

金末の士風と元曲（高橋）

安。嘗題雨中行人扇圖、詩云、幸自山東無稅賦、何須雨里太倉黃、尋思此箇人間世、畫出人來也著忙。雖一時戲語、也有味。知幾若見今日事、又作何語耶。又戲題太公釣魚圖云、向使文王不獵賢、一竿潦倒渭河邊、當時若早隨時世、直喫羊羔八十年。亦中時病也。又有道人云、太公壽命八十餘、文王一見便同車、而今若有磻溪客、也被官中要納魚。雖俚語、可以想見時世也。

(36) 雕景臣作「高祖還鄉」を、參考として次に引用する。

〔般涉調・哨遍〕社長排門告示、但有的差使無推故。這差使不尋俗。一壁廂納草也糧、一邊又要差夫。索應付。又言是車駕、都說是轡輿。今日還鄉故。王鄉老執定瓦豪盤、趙忙郎抱着酒葫蘆。新刷來的頭巾、恰纔來的綢衫、暢好是粧么大戶。〔耍孩兒〕瞎王留引定火喬男女。胡踢蹬吹笛擂鼓。見一夥人馬到莊門、匹頭裏幾面旗舒。一面旗白胡闌套住箇迎霜兔。一面旗紅曲連打着箇畢月烏。一面旗雞學舞。一面旗狗生雙翅、一面旗蛇纏葫蘆。

〔五煞〕紅漆了叉、銀鐙了斧。甜瓜苦瓜黃金鍍。明晃晃馬鞭鎗尖上挑、白雪雪鵝毛扇上鋪。這幾箇喬人物。拿着些不曾見的器仗、穿着些大作怪衣服。

〔四〕轎條上都是馬、套頂上不見驢。黃羅傘柄天生曲。車前八箇水曹判、車後若干遞送夫。更幾箇多嬌女。一般穿着、一樣粧梳。

〔三〕那大漢下的車。衆人施禮數。那大漢觀得人如無物。衆

鄉老展脚舒腰拜、那大漢那身着手扶。猛可裏擡頭覷。覷多時認得、險氣破我胸脯。

〔二〕你須身姓劉、恁妻須姓呂、把你兩家兒根脚從頭數。你本身做亭長就幾盞酒、你丈人教村學讀幾卷書。曾在俺莊東住。也曾與我喂牛切草、拽垌扶鋤。

〔一〕春採了桑、冬借了俺粟。零支了米麥無重數。換田契強秤了麻三秤、還酒價偷量了豆幾斛。有甚胡突處。明標着冊曆、見放着文書。

〔尾〕少我的錢差發內旋撥還、欠我的粟稅糧中私准除。只道劉三誰肯把你揪摔住。白甚麼改了姓更了名喚做漢高祖。

庄屋が軒なみふれまわる。おかみの御用じゃ、否應いわさぬ。その御用がただごとでねえ。かたやまぐさと米おさめ、賦役にも出にゃならぬ。車駕とやら申したり、饗與とみなはいう。そいつが本日お國がえり。王のどんな、素焼きの鉢皿しっかと捧げ、趙の牛飼い、ふくべを抱える。頭巾はいましブラシかけ、どんすのうわ衣は、糊きかせたて、えらそうにかまえて、お大家氣どり。

めっかち田吾作が一團の、キザな野郎をひきつれて、足なみドタバタ、笛太鼓。見れば人馬の一隊が、村の入口にやって来た。先頭きってたなびくは、六七面の旗さしもの。その一面は、霜を迎えた白兔、白い胡蘭に包まれている。その一面にはあげがらす、赤い曲連にしとめられ、その一面には鶏が、舞のまねごととしてごさる。その一面のワン公に、双のつばさ

が生えている。またその一面には、蛇がひさごにからんでる。さすまたは赤のうるし塗り。まさかりはしろがね張り。あま瓜にが瓜は金メッキ。槍の尖につるされて、馬のあぶみがキーラキラ。うちわに一ぱいしきつめた、ま白なあひるの羽かざり。ちゃちな野郎が五六人、見たこともねえ道具もち、なんともけたいな服着てる。

ながえにつなぐは馬ばかり。くびきのもとにろば見えず。黄絹の傘をさしかける、柄は天然のくねり木。車の前には八人の、閻魔の廳の判官たち。車のあとから飛脚が四五人、ほかにあだなおんなども、衣裳・化粧がみなひとつ。

かの大男くるま降り、みな衆がごあいさつ。かの大男おうへいに、人を人とも思わねえ。なみいる村のどんな衆は、足腰のぼしてへいつくばる。大男やおら身をはこび、その手で介添え身をおこす。ひよいと顔あげながめ入る。ながめ入ることさてしはし。あいてがわかればなんのこと、胸もつぶれん腹だたし。

てめえはたしか苗字が劉だべ。女房はたしか苗字が呂だべ。てめえんち二軒の素姓をば、ひとつ一から洗うてくれるべえ。てめえはもともと亭長を、つとめる身して酒びたり。てめえの岳父はちょっくら、學があつて寺子屋師匠。おらが村の東に住まい、おらが家にやとわれて、牛のせわやら野良しごと。春は桑つみ冬場には、おらがところから米借りる。小きざみに融通した、米と麥はかず知れず。小作證文の書き換えて、む

りした麻がはかりに三ばい。酒代の借りを拂うとて、こっそり量った豆も數斗。いやいやこれはでたらめじゃねえ。しかと大福帳にのつてゐる。現に證文がこのとおり。

おらから借りてった借錢は、おらが納める税金から、順ぐり分割ばらいとゆくべえ。おらから借りてった數類は、おらが納める年貢から、かつてに差っ引かせてもらうだよ。この劉三には誰ひとり、手出しできめえ氣だろうが、漢の高祖と姓名を、いくら變えてもむだだべよ。(平凡社「中國古典文學大系」卷二十『宋代詞集』二百六十四頁、田中謙二博士の譯による)

(57) 夫詩者、本發其喜怒哀樂之情。如使人讀之、無所感動、非詩也。予觀後世詩人之詩、皆窮極辭藻、牽引學問、誠美矣。

然讀之不能動人。則亦何貴哉。故嘗與亡友王飛伯言、唐以前詩在詩、至宋則多在長短句、今之詩在俗間俚曲也。如所謂源上令之類。飛伯曰、何以知之。予曰、古人歌詩、皆發其心所欲言、使人誦之、至有泣下者。今人之詩、惟泥題目事實句法、將以新巧取聲名。雖得人口稱、而動人心者絕少。不若俗謠俚曲之見其真情。而反能蕩人血氣也。飛伯以爲然。

(58) 甚哉、風俗之移人也。南渡後、吏權大盛、自高珙爲相定法、其濫轉與進士等、甚者反疾焉。故一時之人、爭以此進。雖士大夫家、有子弟讀書往往不終。……其子弟輩、既習此業、便與進士爲讎、其趨進舉止、全學吏曹。